

# 大学時代の友人関係の維持と役割行動期待\*<sup>1</sup>

新 美 明 夫\*<sup>2</sup>

松 尾 貴 司\*<sup>2</sup>

永 田 忠 夫\*<sup>3</sup>

人は生涯の間にいくつかの重要な環境の移行を経験する。その中で、人は自己の個人的対人ネットワークを再構成して、新しい環境での要請にあったネットワークへと作りかえていく(南・山口, 1991)。その過程で旧環境のメンバーの多くはネットワークからはずれていくが、ネットワーク内に留まり関係が維持される者もある。前報(新美・松尾・永田, 2003)では、大学という環境からの移行を取り上げ、学生時代に形成された友人関係が、現在の環境にどのように移行し維持されているのかを検討することを目的として質問紙調査を行った。短期大学卒業後1~13年あまりの女性を対象としたこの調査では、最近半年間に交流のあった大学時代の友人の人数は、一貫して4人程度の平均値を示しており、卒業後の時間経過にしたがって直線的に減少しているわけではないことがわかった。また、この10年間ほどの間に普及した携帯電話・インターネットといったパーソナルメディアが、友人関係との交流に積極的に利用されていることがわかった。前報(新美ら, 2003)ではとくに調査対象者の学生時代におけるパーソナルメディア(とくにポケットベル)の利用経験に注目して、友人との交流におけるメディア利用の差異に注目した分析を行った。そこでの分析は維持されている友人関係の量的な側面の概括的な報告に留まっており、環境移行に伴う、友人関係の質的な変化を視野に入れたものではなかった。

友人関係はいうまでもなく動的なプロセスを含んでおり、親密な対人関係のひとつとして、その親密化過程に関する数多くの研究が積み重ねられてきた。その中で、親密化過程の段階としては、対人関係の形成、維持、進展、さらに崩壊といった段階が取り上げられてきているが、大学の卒業によるライフコース上の環境移行が対人関係に与える影響としては、恋愛関係の崩壊といった急激な変化は取り上げられてはいるものの(飛田, 2001)、大学卒業後の友人関係のように、継続して維持可能な安定した関係への質的变化といった観点からはあまり検討されてこなかった。下斗米(1999)は対人関係の親密化を「自己開示の交換を通して徐々に明らかにしあった両者の類似・異質点に基づいて、特定な役割行動を遂行するように期待し合い、お互いの影響力を強めていく過程」と捉え、対人関係の各段階を、期待し合う役割行動の変化の観点から捉えようとしている。このような観点から作成された下斗米(1999, 2000)の役割行動期待尺度では「支援性」「自律性」「類似性」「娯楽性」「近接性」「力動性」の6因子が抽出されている。大学卒業に伴う環境移行によって、毎日のように顔を会わせていた共通の場は失われる。対面による頻繁な交流が困難になる中で、当然、お互いに対する役割行動への期待は変化せざるを得ないだろう。とくに「近接性」のような共通の場の存在が前提となる側面については大きな変化が予想される。和田(2002)は、友人関係期待(友人関係に望むもの)という類似の観点から、大

\*<sup>1</sup>本研究は、平成14年度・15年度愛知淑徳大学研究助成(共同研究)を受けた。

\*<sup>2</sup>コミュニケーション心理学科

\*<sup>3</sup>文化創造学部環境文化専攻

学入学という環境移行を取り上げ、入学前からの旧友人と入学後の新友人とを比較している。その結果、旧友人には「自己開示」と「真正さ」を、新友人には「協力」と「共行動」を期待すると報告し、環境移行による友人関係の大きな変化を指摘している。このように、友人の役割行動への期待を分析することによって、大学時代の友人関係の環境移行後の質的な変化を捉える有効な視点が得られることが期待できよう。

前報（新美ら，2003）で行った質問紙調査では、調査時点における学生時代の友人との交流の実態調査とともに、在学時点および調査時点での、友人に対する役割行動期待を設問している。第二報である本稿では、これに基づいて、友人関係の質的な変化を、役割行動期待の観点から検討することを第一の目的としている。また第二の目的として、学生時代の友人に対して期待する役割行動の各種の側面が、調査時点においてどのように具体的な交流となって現れているのかについても検討を行いたい。

## 方 法

本稿で分析するデータは、前報（新美ら，2003）で行った質問紙調査で得たものであり、調査の実施方法や対象者の内訳の詳細は前報を参照されたい。概要のみ再記すると、愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科の全卒業生を対象に、2002年8月から9月にかけて郵送法で実施し、有効回収数として911票を得た。対象者はすべて女性であり、調査時点で、短大卒業後約1年半から13年半である。今回の分析対象の中心となる友人の役割行動への期待は、各項目への回答にあたって、「短大時代、もっとも仲のよかった友人」を想定して回答を求めた。

## 結 果

### 1. 役割行動期待尺度の再構成

役割行動期待尺度は、下斗米（1999，2000）の考案したものをそのまま利用したが、原尺度が「全く期待しない（-4）」から「極めて期待する（+4）」の9段階評定尺度であったのに対して、今回は回答者の負担を考え、「全く期待しない（1点）」から「極めて期待する（5点）」の5段階評定尺度で設問した（大学時代を想定した質問では過去形とした）。また、下斗米（1999，2000）は男女大学生を対象としているが、本稿では卒業後約1年半から13年半の女子短大の卒業生を対象に、在学時点と調査時点の二時点での回答を求めている。そこで、両時点に共通に適用できる尺度であることを確認するため、次のような因子分析を行った。

今回の分析データとしては、下斗米（1999，2000）の尺度構成に使われた34項目すべてを用いている。上述のように、在学時点、調査時点の二時点での回答があるので、それぞれの時点での回答を1ケースとしてカウントし、ケース総数1822のデータを用いて因子分析を行った。

因子の抽出には重み付けのない最小二乗法を用いた。因子数は固有値1以上の基準を設けたところ、下斗米（1999，2000）と同様に6因子が抽出された。プロマックス回転を行った結果の因子パターンを検討したところ、下斗米（1999，2000）の力動性にあたる項目群のうち3項目が自律性にあたる因子の構成項目に移動しており、残った因子で構成された第6因子は独立した因子とは言いがたいことがわかった。そこで、因子数を5因子に減じて、再度同様の因子分析を行った。因子パターンの検討の結果、

どの因子にも0.45以上の因子負荷を示さなかった項目が見られた。これら7項目(項目番号8, 13, 14, 20, 21, 24, 30)を除いて、再々度因子分析を行った。その結果、さらに1項目(項目番号34)が因子負荷の基準を満たしておらず、その項目を除いて最終的な因子分析を行った。その因子パターンを表1に示した。

表1 役割行動尺度の因子パターン(最小二乗法, プロマックス回転)

役割行動項目	1	2	3	4	5
9) 自分勝手な振る舞いを慎む	<b>.621</b>	.074	-.041	-.134	.116
10) 自分なりに信念をもって行動する	<b>.657</b>	.061	-.029	-.011	-.049
15) 時間や約束を破るようなことをしない	<b>.553</b>	.086	.107	-.023	-.107
18) 他人にむやみな負担を与えない	<b>.631</b>	-.092	-.056	.082	.148
19) そのときの気分に流されたような行動をしないよう努力する	<b>.789</b>	-.063	-.071	-.055	.072
23) 自分の言動に責任をもつ	<b>.757</b>	.032	.069	.031	-.187
26) 自分がつらい時, 困った時にもくじけず頑張る	<b>.446</b>	.070	.052	.200	.034
32) 自分が納得できるまで真剣に物事に取り組む	<b>.607</b>	.030	.154	.018	-.035
1) 苦しい立場の時, 味方になってくれる	-.040	<b>.759</b>	.071	-.027	-.006
3) 嘘や隠し事はしない	.122	<b>.606</b>	.028	-.057	.008
4) 私の劣っている面について, 援助や協力をしてくれる	.090	<b>.781</b>	-.154	-.030	.080
5) 困った時, 知恵や物を貸してくれる	-.001	<b>.736</b>	-.011	-.002	.023
6) 何でも気楽に話してくれる	-.006	<b>.639</b>	.164	.031	-.025
11) 一緒に旅行や遊びに行く	-.007	.110	<b>.694</b>	.019	.006
28) お互いの家へ行き合う	.053	-.059	<b>.453</b>	.051	.068
29) なにかある時声をかけて誘ってくれる	-.019	.139	<b>.644</b>	.105	-.094
31) 似たような趣味をもつ	.022	-.076	<b>.484</b>	-.021	.391
33) 買い物やスポーツなど一緒に出かける	.013	-.052	<b>.846</b>	-.064	.020
2) 相手を愉快的な気分にするように努める	-.061	.375	-.024	<b>.499</b>	-.023
12) 場の雰囲気をごませるような話をする	.135	.014	.012	<b>.607</b>	.037
16) いつも, つとめて明るく振る舞う	.239	-.058	-.154	<b>.551</b>	.138
22) ジョークなど, 気楽に楽しめる話をする	-.093	.111	.096	<b>.724</b>	-.066
27) しゃれなどで相手を楽しませる	-.046	-.144	.054	<b>.830</b>	.049
7) 似たような考え方や感じ方をする	-.070	.267	.072	-.057	<b>.657</b>
17) お互いの性格が似ていることを示す	.025	-.070	-.072	.093	<b>.822</b>
25) 同じ物を同じように感じるができる	-.005	.039	.180	.026	<b>.616</b>

(注) 項目番号は原尺度(下斗米, 2000)のものである。

第1因子は原尺度の自律性全5項目と力動性中の3項目で構成されており、因子中最大の8項目構成となった。原尺度の自律性で示されたような社会規範からの逸脱のないよう自らを律する行動とともに、さらにそれらの行動を持続一貫させるような意志的な行動が含まれている。「自律一貫性」と名付けることができよう。第2因子は原尺度の支援性を構成する10項目のうち、5項目で構成されている。かなりの項目が脱落していることから、支援の内容が原尺度と異なる可能性はあるが、このまま「支援性」と

する。第3因子は原尺度の近接性の4項目に加えて、「31. 似たような趣味をもつ」で構成されている。一緒に行動することを通して接触を維持しようとする行動がまとまっている。和田(1993)が「友人関係に期待するもの」として指摘した10領域のうちの「共行動」と呼ぶ方が適切と思われる。第4因子は原尺度の娯楽性とまったく同じ項目構成である。このまま「娯楽性」とする。第5因子は、原尺度の類似性の4項目のうち3項目で構成されている。このまま「類似性」とする。

以上のように構成された各下位尺度について、内的整合性を確認するため、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した結果を表2に示した。いずれの下位尺度も0.8以上を示しており、十分な信頼性があることがわかった。

表2 役割行動尺度の内的整合性

下位尺度	項目数	$\alpha$ 係数
I. 「自律一貫性」	8項目	0.8615
II. 「支援性」	5項目	0.8517
III. 「共行動」	5項目	0.8193
IV. 「娯楽性」	5項目	0.8388
V. 「類似性」	3項目	0.8247

## 2. 在学時の役割行動期待

問題の項でも述べたが、この10年間ほどで人々の利用できるパーソナルメディアは急速に変化・普及してきた。本稿の分析対象者は、この変化の主役であるポケットベル（以下、「ポケベル」と呼ぶ）、携帯電話の急激な普及を大学時代に体験した世代を含んでいる。ポケベルや携帯電話に限らず、各種のメディアの普及は若い世代へのその影響が常に話題にされてきた。そこでの議論は、一般に否定的な、人間関係の希薄化が指摘され、その原因がメディアの浸透に求められてきた。橋元(1998)はこれらの人間関係希薄化論を整理して「個人単位のおたく化説」と「集団単位のおたく化説」の2種類にまとめている。メディアの普及が若い世代の人間関係に何らかの影響を与えるのであれば、友人への役割行動期待にも何らかの変化が現れるであろう。

ここでは、大学卒業後の友人関係の変化を検討する原点としての、大学在学時の友人に対する役割行動期待の状況を把握するとともに、上記のようなメディア普及の影響の有無を検討することとした。前報(新美ら, 2003)では、学生時代のポケベル利用経験に基づいて次のような世代分けがなされている。

1期生～4期生：「未経験」世代：ポケベル未経験

5期生～6期生：「卒業後」世代：短大卒業後にポケベルを経験

7期生～10期生：「短大」世代：短大時代にポケベルを経験

短大在学中または卒業後に携帯電話に移行

11期生～13期生：「高校」世代：高校時代にポケベルを経験

高校在学中に携帯電話に移行開始、短大在学中に移行完了

本稿でもこの分類（以後、「世代」と呼ぶ）に基づいて分析を行うこととする。

役割行動期待尺度の下位尺度毎に平均評定値を算出し、これを調査対象者個々の下位役割行動の期待度得点とした。短大在学時の期待度得点について、在学時のポケベル利用の経験により分類した世代毎に平均値を算出し、世代グループを独立変数として一元配置の分散分析をした結果を表3に示した。これを見ると、すべての下位尺度において、世代の効果は見られず、世代間に有意な差は見られなかった。学生時代のポケベル・携帯電話の普及は、これらの世代の友人への役割行動期待の観点からはとくに影響は見られず、彼らの友人関係を希薄にしたという証拠はとくに得られなかったことになる。

表3 世代別の役割行動尺度の期待度得点の平均値と分散分析結果

下位尺度	期待度得点の平均値				分散分析		
	未経験	卒業後	短大	高校	F 値	自由度	有意性
I. 「自律一貫性」	3.39	3.33	3.29	3.32	1.384	(3,898)	n.s.
II. 「支援性」	3.77	3.76	3.83	3.74	0.785	(3,899)	n.s.
III. 「共行動」	3.50	3.56	3.41	3.38	2.594	(3,900)	n.s.
IV. 「娯楽性」	3.41	3.56	3.48	3.52	1.685	(3,899)	n.s.
V. 「類似性」	3.18	3.24	3.23	3.36	1.491	(3,899)	n.s.

### 3. 大学卒業後の役割行動期待の変化

調査時点における役割行動期待尺度の期待度得点を前項と同様に算出し、短大在学時点の期待度得点との相関係数および、両時点の平均値を算出して比較した結果を表4に示した。

表4 短大在学時点と調査時点における役割行動期待尺度の期待度得点の平均値・相関係数および対応のある平均値の差の検定結果

下位尺度	期待度得点の平均値		相関係数 (有意性)	対応のある平均値の差の検定		
	短大在学時	調査時点		t 値	自由度	有意性
I. 「自律一貫性」	3.33	3.18	.591***	6.96	898	***
II. 「支援性」	3.79	3.29	.405***	17.37	899	***
III. 「共行動」	3.46	2.86	.434***	20.67	901	***
IV. 「娯楽性」	3.48	3.14	.623***	15.11	900	***
V. 「類似性」	3.24	2.78	.651***	17.48	899	***

\*\*\*p<.001

いずれの下位尺度においても、調査時点での期待度得点は短大在学時の期待度得点よりも有意に低い値を示している。毎日同じ大学に通い、密着した関係であった短大在学時に比べ、現在の期待度が低くなるのは当然ではあるが、その落差は下位尺度によって若干異なる様相が見られる。5つの下位尺度の中でとくに大きな落差の見られるのは「支援性」「共行動」の2因子であり、短大時-現在間の相関係数においても、他の因子では0.6前後の値を示しているのに比べ、両因子とも0.4程度とかなり低い。両因子とも、物理的な接触を前提とする役割行動であり、短大という共通空間を離れた現在では、期待する

ことが一般的には困難になることが期待度を低下させた理由であろう。とくに「共行動」では、調査時点の平均値が中点の3点をかなり下回っており、一緒に行動することの困難さが明確に反映された結果となっている。また、卒業後、物理的な接触の容易さの個人差が大きくなるであろうことが、これら2つの下位尺度における比較的lowめの相関となって現れていると思われる。

平均値が調査時点で中点を越えなかった下位尺度は「共行動」以外では「類似性」がある。下斗米(1999)は、親密化過程との関係を検討し、「類似性」においては、親密化後期においても高得点を示さないことを報告している。今回の設問では「短大時代もっとも仲のよかった友人」を想定して回答を求めており、短大在学時点においても他の下位尺度に比べ低い平均値を示しており、それが卒業によってさらに低くなったと思われる。下斗米(1999)の指摘に沿った結果を示しているといえよう。

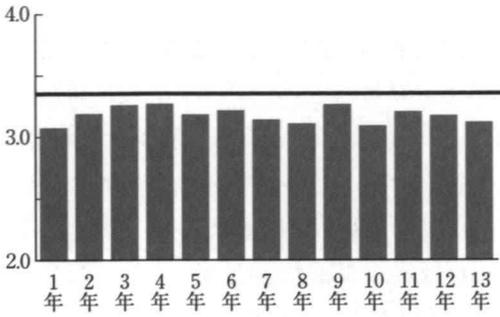
「自律一貫性」「支援性」「娯楽性」の3下位尺度においては、調査時点の期待度得点の平均値はすべて中点である3点を越えており、現時点においても、短大時代の友人への役割期待が継続していることを示している。

次に、対象者を期生別(入学年次別)にして、それぞれ調査時点における役割行動の期待度得点の平均値を算出し、図示したのが図1である。横断的なデータではあるが、期生間の得点を比較することで、卒業後の友人に対する役割行動期待の経年的な変化を検討することができる。図中では期生を、卒業後の経過年数に換算して示してある。この期待度得点について、期生を独立変数として一元配置分散分析を行った結果を表5に示した。

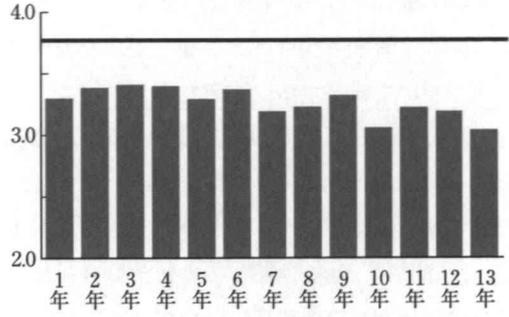
分散分析の結果、期生(卒業後の経過年数)の要因が有意な効果を示し、経年的な変化が見られたのは、「共行動」「類似性」の2つの下位尺度である。他の3つの下位尺度については、上記で検討したように、在学時点との落差は見られるものの(図中で、在学時点の平均値は太い水平線で示してある)、卒業後の経過年数に応じた変化は有意ではなかった。

期生の効果の見られた「共行動」「類似性」については、HSD法による多重比較を続けて行った。その結果、期生間に有意差のあったペアについては図中に示した。これらの2つの下位尺度の多重比較結果を見てみると、細かな凹凸はあるもののいずれも、卒業後の経過年数にしたがって、漸減する傾向にあるとみてよいだろう。「共行動」は物理的な接触を前提としており、卒業後、年数が経過するとともに一緒に行動をすることが減り、期待度もしだいに減少していくのであろう。卒業後7年以降の期生においては、すべて中点の3点を下回っている。「類似性」については、親密度の高い対人関係においてはもともと低得点であることが報告されているが(下斗米, 1999)、ここでも同様の結果が示されている。しかも、卒業後3年目以降という早い時点から、平均値が中点の3点を下回ることが示されている。

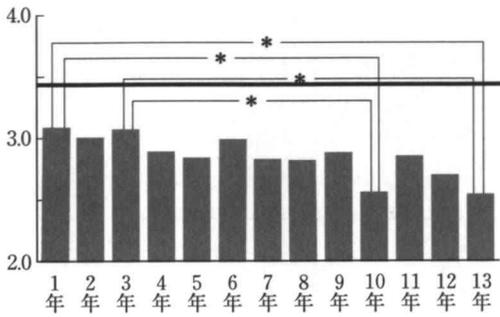
期生(卒業後の経過年数)の影響が見られなかった3つの下位尺度のうち、「自律一貫性」「娯楽性」については、その平均値も3点前後で推移し、それほどの特徴は見られない。「支援性」については在学時点ほど高くないが、5つの下位尺度の中ではもっとも高得点を保っており、期待度の高さが持続することを示している。支援の内容は異なってくるにしても、大学の卒業という環境移行に耐え、次のライフステージに持ち越される友人関係に期待される中心的な下位尺度であるということだろう。



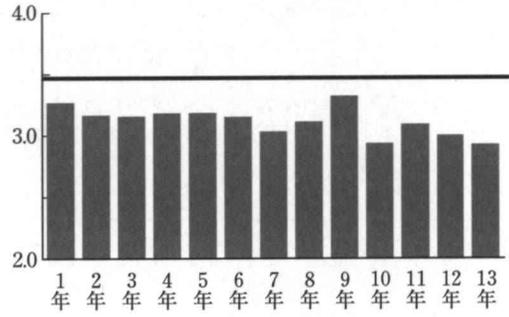
I. 自律一貫性



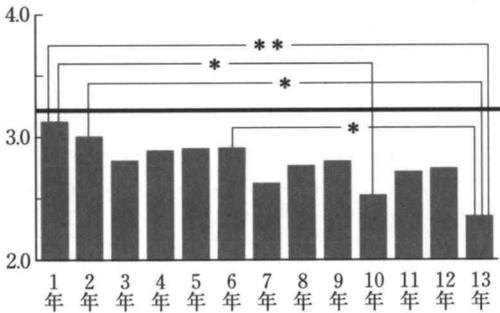
II. 支援性



III. 共行動



IV. 娯楽性



V. 類似性

\*\* p<0.1

\* p<0.5

図1 役割行動の期待度得点の卒業後経過年数別の平均値の推移

表5 期生による役割行動尺度の期待度得点の一元配置分散分析結果

下位尺度	分散分析		
	F 値	自由度	有意性
I. 「自律一貫性」	0.494	(12,890)	n.s.
II. 「支援性」	1.278	(12,890)	n.s.
III. 「共行動」	2.784	(12,891)	***
IV. 「娯楽性」	1.437	(12,891)	n.s.
V. 「類似性」	2.954	(12,890)	***

\*\*\* p<.001

#### 4. 役割行動期待とこの半年間の交流

ここでは、短大時代もっとも親しかった友人に対する役割行動への期待度と、この半年間の交流状況の関連について検討する。交流状況については、対面を含む6種類のメディアを使った交流回数が設問されたが、前報(新美, 2003)での分析の結果、比較的回数の多かった対面・電話・携帯メール・Eメールをここでは取り上げる。交流回数については、利用するメディアによって極端に回数の多いものや「数え切れないほどたくさん」という回答も含まれるため、取り上げる4種類のメディア共通に「交流なし」「3回以下」「3回超」の3カテゴリーに分類しなおして分析することとした。

また役割行動への期待度についても、おおむね1/3ずつの人数が所属するように「期待度低群」「期待度中群」「期待度高群」の3グループに分類しなおした。各下位尺度における役割行動への期待度の分類基準と人数は表6のようである。

表6 役割行動の期待度の分類基準と所属人数

下位尺度	期待度得点の範囲(人数)		
	期待度低群	期待度中群	期待度高群
I. 「自律一貫性」	1.0～2.9(294)	3.0～3.5(321)	3.6～5.0(288)
II. 「支援性」	1.0～2.9(279)	3.0～3.9(393)	4.0～5.0(231)
III. 「共行動」	1.0～2.3(241)	2.4～3.3(386)	3.4～5.0(277)
IV. 「娯楽性」	1.0～2.7(236)	2.8～3.5(367)	3.6～5.0(301)
V. 「類似性」	1.0～2.2(251)	2.3～3.2(355)	3.3～5.0(297)

役割行動への期待度の3群と各メディアを使った交流回数をクロス集計し、各期待度群別の交流回数の比率を示したのが、図2から図6である。役割行動期待の各下位尺度ごとに4種類のメディアによる交流の結果をまとめて示した。

続いて、このクロス集計結果について $\chi^2$ 乗検定を行い、その結果を図2から図6のグラフ中に示した。これらに見られるように、もっとも親しい友人への役割行動期待は、すべての下位尺度において、その友人との検討したすべてのメディアを使った交流回数と有意な関連があることがわかった。すなわち、いずれの役割行動の下位尺度においても、その期待度が高いほど、どのメディアによる交流回数も多いことが示された。

### 考 察

本稿の第一の目的は、友人への役割行動期待という下斗米(1999, 2000)の指摘した視点を取り入れることによって、大学の卒業という環境移行後の友人関係の質的な変化を検討することであった。分析の結果、役割行動期待を構成する5因子すべてにおいて、在学時点と現在とではその期待度に大きな落差があり、友人関係に大きな変化が現れることが明らかにされた。しかしながら、卒業後の経過年数に基づいて、その変化パターンを検討したところ、期待度がさらに漸減していく因子と、あまり変化の見られない因子とがあり、後者の中でも「支援性」は、比較的高得点を保ったまま維持されることがわかった。「支援性」の因子は、原尺度では10項目を擁する最大の因子であったが、本稿での分析では、その中から5項目が脱落し、他の因子と同程度の5項目構成となった。参考までに脱落した項目をあげると表8の通りである(項目番号は、下斗米, 2000による)。

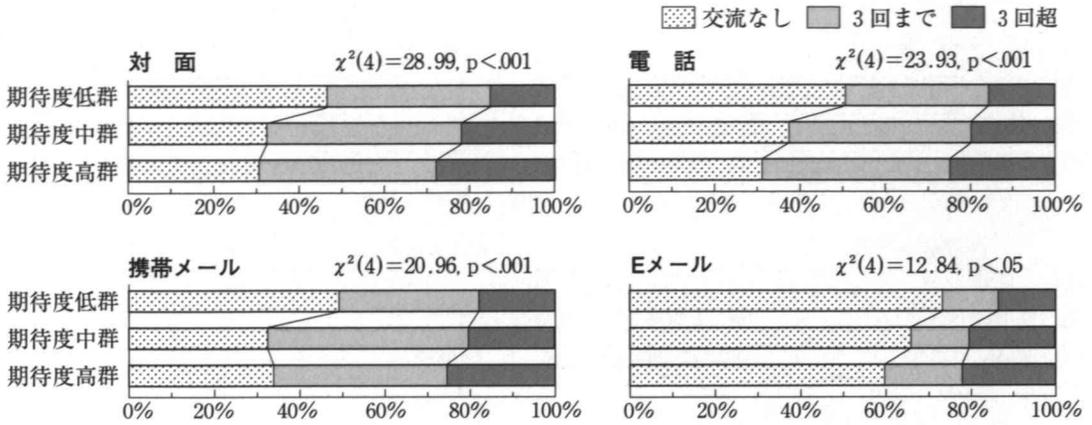


図2 「I：自律一貫性」の期待度別のもっとも親しい友人との交流回数（最近半年間）

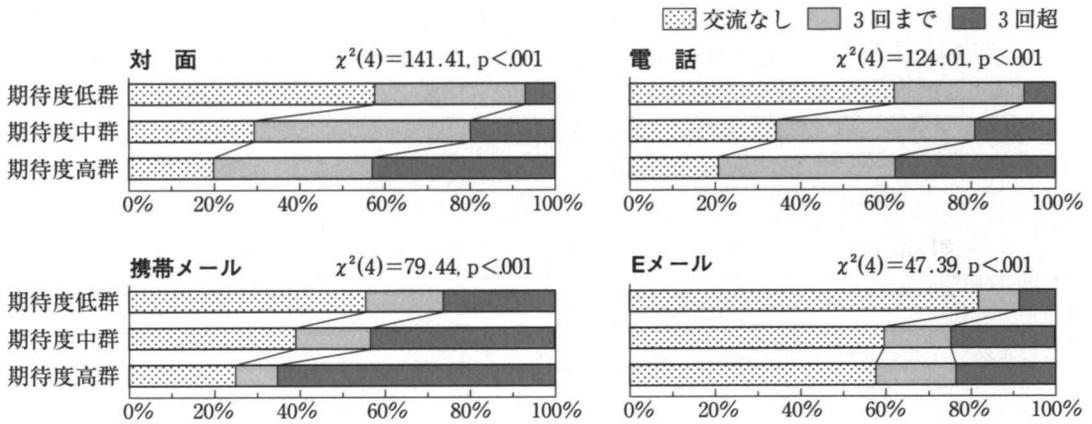


図3 「II：支援性」の期待度別のもっとも親しい友人との交流回数（最近半年間）

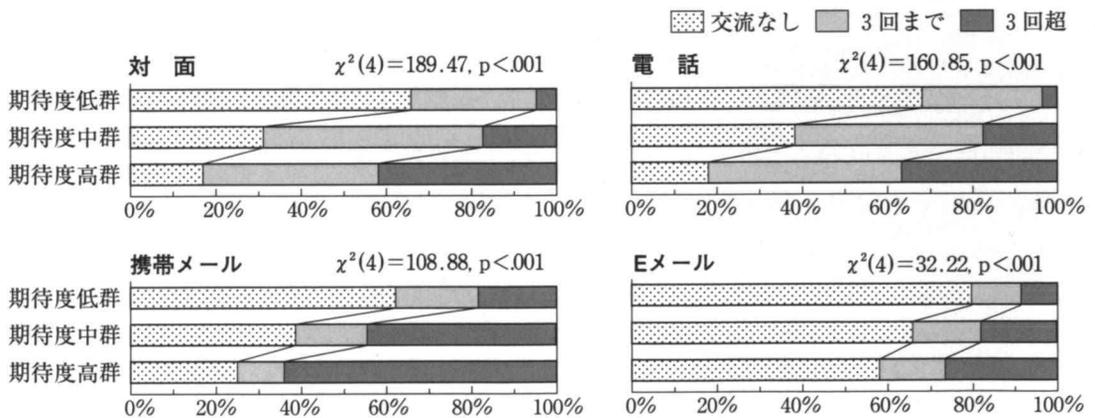


図4 「III：共行動」の期待度別のもっとも親しい友人との交流回数（最近半年間）

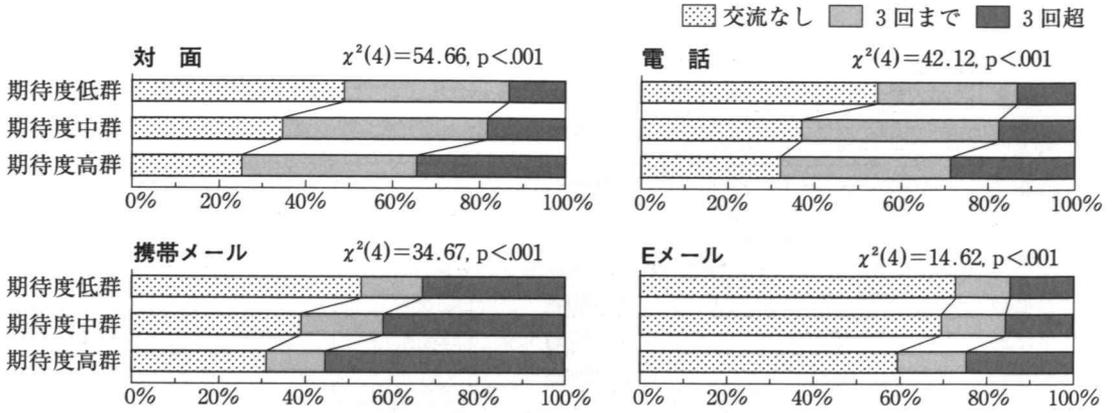


図5 「IV：娯楽性」の期待度別のもっとも親しい友人との交流回数（最近半年間）

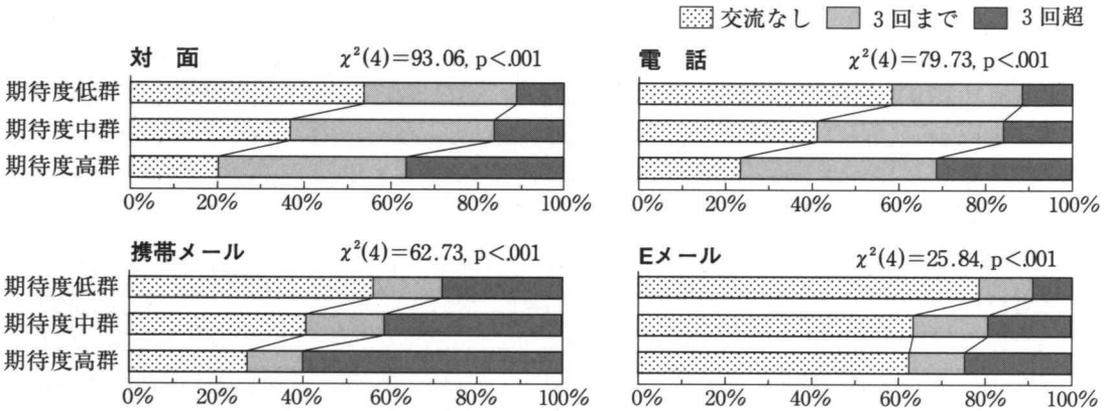


図6 「IV：類似性」の期待度別のもっとも親しい友人との交流回数（最近半年間）

表8 原尺度の「支援性」構成項目で本稿の分析では脱落した項目

- 
- 13) 感情的になっている時のなだめ役になる
  - 21) 悩み事や愚痴などを聞いて理解を示す
  - 24) いつでも相談に応じる
  - 30) どう行動しようか迷った時、適切な指示ができる
  - 34) 困っている時、できるだけ助けようとする
-

これらの項目を見てみると、即時的な対応を期待する項目が多く、常に接触のある状況でないと支援が成立しにくいものが多い。頻繁な接触が保証されない大学卒業後のデータをも分析の対象にしたことで、これらの項目が脱落していったものと思われる。したがって、原尺度の「支援性」と、本稿で得られた「支援性」とは、その内容がやや異なると言えるだろう。頻繁な接触がなくても、メディアなどを利用することによって支援が可能な項目のみが残ったのではないかと思われる。物理的には離れていることがあっても、必要な時には支援が期待できるような関係、というのが大学卒業後にも継続維持される友人関係に求められているといえよう。

本稿の第二の目的として、大学卒業後の友人に対する役割行動期待と、実際の交流との関係を検討した。その結果、5つの下位尺度すべての役割行動について、期待度が高いほど、各メディアを利用した交流回数が多いことがわかった。今回は「短大時代でもっとも仲のよかった友人」一人だけを取り上げて分析を行ったが、前報(新美ら, 2003)で報告したように、卒業後の経過期間にかかわらず、4人前後の友人との交流が行われていることを考え合わせると、各種のパーソナルメディアをうまく組み合わせて使うことで、友人への役割行動期待を現在の環境に適合するように変化させつつも、積極的に大学時代の友人関係を維持しているように思われる。和田(2001)は、大学入学という環境移行を取り上げ、旧友人には「自己開示」と「真正さ(本稿での「自立一貫性」と類似する)」を、新友人には「協力(本稿での「支援性」と類似する)」と「共行動」を期待すると報告しているが、先に述べたように、本稿の分析では、大学卒業後10年あまりを過ぎても、なお「支援性」は高い期待度得点を示している。和田(2001)はさらに、「本研究の実施時点(1997年)以降に、大学生の間に急速にEメールや携帯電話が普及した。これらは距離と時間をほとんど意識せずに用いられる。したがって、旧友人との関係のあり様が変わりつつあるかもしれない」と指摘しているが、本稿の結果はその一端を示しているのかもしれない。

## 文 献

- 橋元良明 1998 第6章 パーソナルメディアとコミュニケーション—青少年に見る影響を中心に—竹内郁郎ら(編著)メディア・コミュニケーション論 北樹出版 117-138.
- 飛田操 2001 第9章 親密な対人関係の崩壊 土田昭司(編)対人行動の社会心理学 北大路書房 108-116.
- 南博文・山口修司 1992 大学生活への移行 山本多喜司・ワップナー, S.(編著)人生移行の発達心理学 北大路書房 179-203.
- 新美明夫・松尾貴司・永田忠夫 2003 大学時代の友人関係の維持とメディア利用 愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—, 3, 105-119.
- 下斗米淳 1999 対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化に関する研究 専修人文論集, 64, 1-32.
- 下斗米淳 2000 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行とのズレからの検討— 実験社会心理学研究, 40(1), 1-15.
- 和田実 1993 同性友人関係:その性および性別役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8(2), 67-75.
- 和田実 2001 性, 物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72(3), 186-194.